

## IKGの旅館経営再生塾

### 第150回 再生できる旅館、できない旅館の違い

執筆担当者 孫田 猛

あくまでも経験則からの話であるが、再生できる旅館と、できない旅館の違いにはいくつかの要因がある。

これはいわゆる金融機関が見極める財務的な分析結果ではなく、再生現場で感じる経営サイドの資質のようなものが存在する。

第一に、再生すべき状況にあるということは、悪化した事実が前提として存在する。この理由を経営者自身が謙虚に受け止め、自己分析ができているかどうかである。あえて理解しようとしなない、あるいは他の原因のせいにしてしている経営者がいる。この考え方から脱却しない限り、また同じ過ちを繰り返す恐れがある。

第二には再生に対する姿勢が素直かどうかである。再生案件のレッテルを貼られたとき、その旅館経営者は今まで築いてきた社会的な立場、自尊心、見栄を一挙に否定されることもある。人生初めての屈辱を味わい、それでもそれを認めたくないため、中には再生支援協議会を通して再生を申し込んできた場合においても、政治家を絡ませてきたのだからと高飛車の態度を崩さない事例もあった。これでは進むべきことも進まなくなってしまう。

第三には、さまざまなアドバイスに対して改善のスピードがあるかどうかである。この差はとても大きな要因である。行動がのろい旅館は、たとえば本来一週間でできることが、一年以上かかることもある。これでは機会損失がはなはだしい。本気で再生をする気があるのかどうか、優先順位をどのように意識しているのかとってしまう。

第四に経営者サイドが一族の場合が多いが、この一族の仲がいいかどうかである。きわめて悪い場合は、まともな話し合いも行われないため、いわゆる決め事が中途半端になってしまう。これでは従業員とのコミュニケーション云々以前のレベルである。

再生案件が新たに発生した場合、まずこのような条件をクリアできるかどうか、再生の実現性のポイントとなる場合が多い。しかしこれらは再生に限らず、中小零細企業経営の基本的な前提条件である。

経営者は一度、自社分析を実施し、それぞれの評価を確認することをお勧めする。

<http://ik-g.jp>

[e-mail:magota@ik-g.jp](mailto:magota@ik-g.jp)